

お伽草 かちかち山の段

〔解説〕初代竹本綾之助原案・平成二十四年（二〇一二）鶴澤三寿々補曲。誰もが一度は聞いたことのあるおとぎ話をもとに、大正時代の初めに作られた新作義太夫です。大正十五年にはラジオでも放送されたという記録が残っています。近年では狸が改心して終わる、という絵本もあるようですが、この作品では、昔ながらのやや残酷な内容となっています。

〔あらすじ〕昔々、仲睦まじく暮らす老夫婦がおりました。山仕事に精出すお爺さんに悪さを繰り返す大狸がおり、怒ったお爺さんは、ついに狸を生け捕りにします。お爺さんの仲間が、お爺さんより先に狸を担いで家に届けます。「たぬき汁」にされるといふ話を聞いた悪賢い狸は、何とか逃れようと、お爺さんの戻らぬうちにお婆さんを騙し、痛めつけて殺してしまいます。お婆さんに化けた狸は、家に戻ったお爺さんに、「たぬき汁」と偽って料理したお婆さんを食べさせます。その後正体を現した狸は、お爺さんに悪態をつき、山へと逃げ帰るのでした。お爺さんがお婆さんの死を嘆いていると、そこへ兎が通りかかり、その訳を聞き狸への敵討ちを約束します。兎は山へ行って素知らぬふりで狸を柴刈りに誘い、背負った柴に火打ち石で火をつけます。背中を火傷した狸は、背中を冷やそうと海へ向かいます。兎の計略で泥船に乗せられた狸は、敢えなく海に沈み、お婆さんの敵討ちは成功するのです。

萬に芽生の和子がお伽草、添乳枕の片言に、むかしむかし其昔爺と婆とがあつたとき、其のくり言の糸車、まわして手繰るつみ糸の、長き齡を睦まじふ、爺が帰りを松杉の、落葉焚くなる夕けむり、折柄門へ杣仲間

「婆様〜」

と声高に、向ふ鉢巻さし荷ひ、重い獲物を気軽者、ヤットまかせとかつぎ込み

「これこれ婆様やこちの爺様がゑらい手柄、鎮守の森のもゝがア化提灯の古狸を、なんと見されやこの生捕り、われらは後の棒ちぎり、鼻は明いたり紐通し、面目ないがかつぎ役、何が先ず手柄〜」

とほめそやせば、婆はほくほく笑顔をつくり

「フゝそうかいのふ、したが爺が手柄と云ふものゝそなた衆が附いて居りやこそ、こりや村中の手柄ぢ

やわいの、そして爺さまは何処ぞへ行てかの」

「ライノ庄屋様へちよつくら寄つて狸話をしてくるげな、わしらは先へ届けに来た、爺さまが戻らば狸料理、ばんげは汁の振舞じゃ」

と云ふた

「狸置いたら又出なほし、存分よばれに来やうぞや」と喰わぬ内から腹つゞみ、打はやしてぞ帰り行く。後に狸はいましめの縄もゆるみも泣くばかり、婆は見る程小気味よく

「憎いやつめやがて爺様が戻らうなら、振舞の狸汁人をあやめた天罰で人に喰はれてしもふげな」

と縄引きたてゝ古柱、くゝし付ければ、しほしほ涙、哀れ見せるも嘘の皮、狸は声をくもらせて

「あゝもし婆様化けおどした身のむくひ味噌汁攻めもいとわねど、穴に残した妻や子が、後の嘆きは

いか斗り思へば過し月の宴、八畳敷きの草むしろ、親子揃ふて浮れ打つ、狸ばやしも今は早破れ鼓となつたるかせめて最後の思ひ出に、聞こえぬまでも別れの鼓小手をゆるめて打たせて」

と身をもがき泣く有様に、婆は性得やさしさの思ひやつて気の毒顔

「畜生でも妻子の事憎いとは云へ情は情、逆も叶はぬ命の際、爺様の戻つて来ようまで名残の鼓打たせてやろ」

と、又化かさるゝ空言と知らぬ佛気老心小手をゆるめいましめのあやふき業の綱わたり、得たりと立てたるかくし爪、驚く婆を突き倒し、起きんとするを引きすへて、思ひ知れやとかきむしる

「あれえ爺様村の衆いの」
と、救けを呼べど声つまり、かよわき老いの甲斐も

なく折れて其のまゝ枯れすゝき、あへなく息は絶へにけり。

爺は庄屋から祝ひ酒かたげて帰る門口

「婆戻つたぞや」

と内に入れば

「ヲ、親仁殿今日はまあゑらい手柄」

と白化のたすきはづして腰のばし

「捕へてござつたあの狸、料理せうは婆が役と、つ
いこしらへた狸汁、あんじよう出来て居ますぞや」

「何じやもう出来たとはゑらい手際、庄屋様からこれ祝ひ酒、村の衆も今にみえようが、出来たと聞いては咽喉がなる。みな衆の来る前に初やりとでかけやふか」

と、それと知らねば相酌の炉ばたに老の差向ひ飲むは一生添ふ婆が、かたみの汁と気も付かず

「云はれぬ味」

と喜ぶ顔

「ああうまいく、ハハこりやうまいわ、もう一杯

くもらおうかい」

見るよりこなたは打笑ひ

「ウフ、ハ、ハ、うまいか爺様アハ、ハ、ハ、ハ、」

の声の下、たちまち現はす狸の正体

「うまうま喰べたその汁は、おのれが戻らぬ其暇に

婆を料つた婆汁じゃ、流しの下の骨を見よ」

と驚く爺を突退け蹴のけ、何処ともなく失せにけり

「エ、何事ぞおのれやれ、どうしてくれう」

と追かける力も張もぬけ果て、哀れ涙のながしも

と、まろび寄つて打見れば、目もあてられぬ婆が死

骸

「ええええこりやまあどうせうすべもなく、手柄が

婆を殺すとは何の因果」

となきがらを抱き嘆くぞ道理なり。かくとは誰か白

兎とくさ畑の戻り道、柴の戸もるゝ声聞きつけ

「是は如何」

とたづね寄り

「どうした事」

と利き耳に

「何じゃそりやあの狸奴が」

「ライのふ狸汁をさか様な婆汁としてやられた」

と云ふも涙のむせび声

「ウム憎い狸めオットよし、この兎が合点、婆様が

敵討つてくれふ、爺様必ず心配せまい、これから山

へ追ひかけて、柴の火あぶりカチカチ、逃げれば海

へどんぶりこ、打よす浪の汐かげん、村の衆見えた

ら後からごんせ」

と云ふが早いかはね兎いさんでこそは飛んで行く。

山又山の小夜嵐、そよぎの音も暗き身の、狸は背中の柴がくれ燃ゆる思ひの火打石、こけつまろびつやうやうこゝへ、海近くたくみと知らず土船へ、ヒラリと載つてもやひ綱、とくまも心沖津波、逃ぐるを、やらじと兎は木船腕にまかせて漕よせ漕よせかぢづか取つて打かゝれば、狸も今は死にも狂ひ、互に争う二打三打、うけるを、刎ねのけ、振り下す。

目にもとまらぬ兎の早業

「こりやかなわぬ」

と命のおもかぢ、息せき狸は

「ヤッシッシイ〜」

兎は身軽に

「ヤッシッシイ〜」

寄す浪引く浪、渦まく浪に、土船の櫓がひ八重く

「コリヤどうじゃ」

逃げも叶わぬ大汗に、兎は得たりと木船のへさき、土船目がけてつゝかくれば、汐に甲斐なき土崩れ、見る見る舟はぐぢぐぢ〜〜、ともに狸の沈みつ浮いつ、苦しむ様ぞ笑止なり。爺は岩根に小手かざし、続いて集ふ人々が、加勢の声の勇ましく、しゅびの花咲き勝兎、きたへの杵の連れ拍子、沖の千鳥のみなめざめ、羽音も和して喜びに、明け行く空の東より、海原染むる朝日影、狸の腹へ満汐の、しづまる御代の絵そらごと、お伽草紙を綴ぢおさむ。

ちかごろかわら たてひき

ほりかわさるまわ

近頃河原の達引 堀川猿廻しの段

〔解 説〕 作者不詳。初演は天明三年（一七八三）と天明五年の説があります。京の聖護院であった心中事件を軸に、四条河原での喧嘩、親孝行な猿まわしのエピソードなどが織り込まれた、上中下三巻の世話物。中の巻「堀川猿廻しの段」の、「そりや聞こえませぬ伝兵衛さん」というおしゆんのクドキが有名です。

〔あらすじ〕 井筒屋伝兵衛は遊女おしゆんと恋仲ですが、横淵という役人が横恋慕したため、四条河原で刃傷沙汰となり、伝兵衛は、横淵を斬り殺してしまいます。幫間久八が恩に報いようと身代わりになり、伝兵衛は落ちていきます。おしゆんは堀川の実家に返され、心配する母と兄はおしゆんに伝兵衛宛の退き状を書かせます。その夜、伝兵衛が忍んできて、母たちは追い返そうとしますが、暗がりの中、誤って伝兵衛を家の中に入れてしまいます。そこで先ほどの退き状を伝兵衛に突きつけるのですが、それは実は母と兄に宛てた心中の書き置きで、盲目の母と無筆の兄は、そのことに気づかず退き状と思い込んでいたのです。おしゆんの思いを知った母たちは、やむなく二人を共に落ちのびさせ、兄ははなむけに猿まわしを披露します。心中を決意した二人ですが、勘定役人だった横淵の悪事が発覚したことから、二人は許され、めでたく夫婦となるのです。

同じ都も世につれて、田舎がましの薄煙、堀川辺に住居して後家の操も立つ月日。琴三味線の指南屋も、合の手もつれ気もつれを、保養がてらの葉風呂、煽ぐもわれを洩団扇、目さへ不自由な暮しなり

「おつるさんさぞ待遠にあらうな。そしてなにやらのさらへであつた。ヲ、それ鳥辺山。アリヤじたい心中ごと。会にでも弾くのなら、お前は女子の方、おしげさんは男の方と掛合ひに唄ふがよいぞえ。ドレ／＼おしげさんの代はりにわたしと掛合ひに唄ひませう」

と、古い手弾く手もしをらしき

へ女肌には白無垢や 上に紫 藤の紋 中着緋紗綾に黒繻子の帯 齡は十七初花の 雨にしをるゝ立ち姿

へ男も肌は白小袖にて 黒き綸子に色 浅葱裏

二十一期の色盛りをば

へ恋といふ字に身を捨て小舟

へどこへ取付く 島とてもなし

へ鳥辺の山はそなたぞと

へ死にゝ行く身のうしろ髪

へ弾く三味線は祇園町

へ茶屋のやま衆が色酒に

へ乱れて遊ぶ騒ぎ合ひ

へあの面白さを見る時は

「イエ／＼それではとんと声にしをれがないわいな。

へあの面白さを見る時は』と、かう唄ひなされや」

や」

「アイ、へあの面白さを見る時は』」

「ラットよし／＼」

へ染殿そなたとそれがしが

へ去年の初秋七夕の座敷踊りをかこつけて 忍び逢うたと思ひ出す

「ヲ、今日はマアそこまでく。精が出るほどあつて、きつう手も廻り出した。モウくどこで弾きなさつても、恥ずかしいことはないぞえ」

と、聞いて笑顔の片男波

「また明日」

といふ汐に、おつるは立つて帰りける

鐘も哀れ添ふ。頃しも師走十五夜の、月は冴ゆれど胸の闇、過ぎし別れのいひかはし、死なば一緒と伝兵衛が、忍ぶ姿のしよんぼりと、たゞずむ軒は見覚えの

「たしかにこゝ」

と門の戸へ、さはる合図の咳払い

「おしゆんぢやないか」

「伝兵衛さん。よう逢ひに来て下さんした」

と、いふ声、寝耳に与次郎がびっくり。起きると開くる門の口妹が姿も暗紛れ、捕らへる袖のふりあはせおしゆんと心得伝兵衛を無理に引込み、取り違へ、戸口をうちからびつしやり引き立て

「そりやこそ突きに來をつたぞ。おしゆん。必ず外へ出まいぞや。戸口はおれが押へてゐる。ヤア、門にゐるは伝兵衛ぢや、く」

「お袋兄御。ア、面目もないこの姿」

と、なほも小隅に屈みゐる

「コリヤヤイくくそのやうにしほくとして見せて、おいらを欺して、おしゆんを突かうとするのか。へ、その手はくはぬ」

と懐より一通取り出し、こはぐながら傍に寄り

「コリヤヤイ伝兵衛。おしゆんとわれと手が切れぬ

と、科人のわれぢやによつて、妹まで難儀するわい。
それでさつきに妹に得心さして、退き状が書かして
あるわい。サア／＼これを見いやい。これぢやによ
つて、モウ／＼／＼おしゆんが方に残心気は離れて
あるわい」

「エ、その心とは知らず、いひかはした詞を誠と思
うて、迷うて来たが無念なわい。口惜しい」

と齒を喰ひしぼる男泣き。恨みを聞くも隔たる戸口、
心はさうぢやないじやくり

「フ、さぞ腹が立たう道理ぢや／＼／＼わいな。ガ
マアとつくりと気を鎮めて、退き状を見て下さんせ
いなア」

「フツトそれでよい長うものいやんな。屑が出るぞ
屑が。サア／＼はやう」

と封じ目切り、突付けられて目に溜る涙を払ひ

「エ、『誠にこれまでの御養育、海山にもたとへが
たき親の御恩。殊さら不自由なる御身の上、なにと
ぞ首尾よう勤めを逃れ、世を樂に過ごさせまし候
はゞ、せめて少しの御恩報じ、孝行の片はしにもな
り候はんと、そのみ朝夕祈り参らせ候ところ二世
までといひ交し参らせ候伝兵衛様。思はぬ今度の御
身の難も、根を尋ぬればみなわれゆゑに候へば、い
まさに見捨て候ては、女の道立ち申さず候。』エ、
『不孝とは思ひながら、ともに覚悟を極め参らせ候』
ム、さてはさうした心か」

と、驚く伝兵衛。親子はうろ／＼

「気づかひなコレ兄や、娘をうちへ、はやう／＼」

と母があせれば、与次郎も戸口を開くれば走り行く、
妹を無理に四人が顔見合はして溜め息の涙はさら
に、分ちなく。なんと詞も伝兵衛、泣く目を拭ひ

「一旦いひ交はした詞を立て、ともに死なうと覚悟して、義理を立てぬくそなたの貞節。忘れはせぬ、嬉しいぞや。思ひ廻せば廻すほど、われこそ死なで叶はぬ身、そなたは科のない身の上、ともに死んではお二人の歎き、命ながらへなき後の、とひ弔ひを頼むぞ」

と、詞に『わつ』と泣き出だし

「そりや聞えませぬ伝兵衛さん。お詞無理とは思はねど、そも逢ひかゝる始めより末の末までいひ交はし、互ひに胸を明かし合ひ、なんの遠慮も内証の、世話しられても恩にきぬ、ほんの女夫と思ふもの大事のく夫の難儀、命の際にふり捨てゝ女の道が立つものか。不孝とも悪人とも、思ひ諦めコレ申し、一緒に死なして下さんせ」

と、隠せし剃刀取り直す

「マ、マ、待て、待ちをれくくやい。コリヤヤイ、これで死ぬるとわりやマア命がないぞよ。コリヤマアどうしたらよからうぞ」

と、いふもおろく。母親も

「ヲ、さうぢやく。わが子が可愛いくと、子ゆゑの間に脇ひら見ず、これまでおしゆんがお世話になつた恩も義理も弁へず、一途に仲を引分けうと思ふた母は義理知らず。賤しい勤めする身でも女の道を立て通す。娘の手前、エ、面目ない。娘が心に恥ぢ入つて天にも地にもかけがへない、可愛いわが子を心中に、合点してやる親心。この道理を聞き分けて、コレ拝みますく」

と、手を合はしたる母親の、子ゆゑに迷ふ闇の闇。

二人はなんと詞さへ、涙に涙結ぼるゝ、血筋の別れ与次郎も、涙の雨の古布子袖喰ひしぼり、しやくり

泣き

「ア、伝兵衛さんの泣かしやるも道理ぢや、またおしゆんの泣きやるも道理ぢや。ガコレ申し伝兵衛さん。母者人がいまの詞、御合点が参りましたか。え、コリヤ妹われも得心してくれたか、合点がいたか。得心してくれたか。サア、合点したらばどうぞこの場を立退く分別、しかしその姿では人目に立つ。京の町を離れるまで、この編笠で顔かくし、幸ひの猿廻し、まめで二人が末長う、めでたう女夫になりとげる、門出の祝ひにこの与次郎が、お初徳兵衛が祝言の寿、こなた衆も生き別れの盃。ア、イヤ、祝言の盃」

と、祝ひ諷ふも声びくに

へお猿はめでたや、なア。聳入り姿ものつしりと、コレさりとは、ナウヨウあるかいな、

さんなまたあるかいな、ヲ、徳兵衛さんごんせ。

あんまりこなさんが来やうが遅いによつて、お初さんは顔真つ赤にして腹立てていやんすわいなう、コレコレお初さん、お初さんえ、聳さんが盃をしたいといなう、機嫌直して盃を戴かんせ、ヤコレ、コレ、コレコレコレ、戴くのう盃をさんな、又あるうかいなう、ヤコレコレ聳さん、足で盃をさすとはあんまりつれない、それでは嫁御さんが戴かんせぬわいなう、ひぞらずとほんまにさしてやらんせ、ほんまにさすのじや、ほんまに、サ、オ、オ、そうじや、そうじや、そじや、そじや、そじやそじやそじや、ヤーそこでお初さんが戴いたものじや、コレ戴こなう盃をさんな又あらうかいな、コレ嫁御の昼寝もころりとせい。ナコレエ、あるかいな、さんなまたあるかいな、コレ、聳さん、あんまりつ

れなうさんすによつて、おしゆんイヤナニ嫁御さん

が起きさんせぬわいの、そこでチヨイト起こした

り、チヨイくくトコナと起こしたり、起こすの

ぢやがなく、エ、またてんごうしておるか、コ

リヤ起こせ、起こさんかい。シイこれはしたり、オ

レの顔まで掻きやがるかい。ア、なんさらすぞい、

とつともさりとはくノウヨウあるかいな、さんな

またあるかいなア。起きたら互いに抱き付きやれ、

ヲ、それで機嫌が直つたぞ。エ、あるかいな。さん

なまたあるかいな。くるりと返つて立つたりな。立

つてくれ。コレくくコレく立たしやませ。つ

いでに日和を見てたもれ。ア、よい女房ぢやにく

ノウあるかいな。さんなまたあるかいなア。日和を

見たらば落ちてたもくヲ、そうぢやくくお

猿はめでたやくなサアくきりくこの家

を、猿廻し」

「まさるめでたう、いつまでも、命全うしてたも」

と、目は見えねども見送る母。詞もこの世で聞き納

め、心のうちの暇乞ひあすの噂となりふりもやつす、

姿の女夫連れ。名を絵草紙しようこじに聖護院しよごいん森を、あてどに

たどり行く

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます

(一般社団法人 義太夫協会発行)